

平成28年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 宮原 良夫

<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 〇字 </div> <p>本校のミッション</p> <p>今日より輝く明日のために</p> <ul style="list-style-type: none"> 目的をもって登校できる 確かな学力を身につける
--

学級数	12 学級	児童(生徒・園児)数	319 人
職員数	34 人	家庭数	294 戸
学校関係者評価委員	檜崎 裕志 (地域住民・学識経験者・矢掛町人権擁護委員・元中学校長) 安藤 壽司 (地域住民・学識経験者・元小学校長) 植田 辰哉 (保護者・矢掛中学校PTA) 古城賀津子 (地域住民・地域支援コーディネーター) 岩崎 恭子 (地域住民・家庭環境改善サポーター・矢掛中学校地域支援コーディネータ) 笹井美帆子 (保護者・山田公民館主事) 田中 真秀 (学識経験者・川崎医療福祉大学) 高木 亮 (学識経験者・就実大学) 川上 公一 (学識経験者・前県立矢掛高等学校長)		

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上を目指した授業改善を図る。 総合的な学習の時間を系統的な取組にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の授業で、電子黒板や指導用デジタル教科書等のICTを効果的に活用する。 グループ活動を取り入れ、進んで考えを述べるができるように支援する。 3年間の系統的な取組で、課題設定力や課題追求力、情報活用能力、プレゼンテーション力を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員全員がICTを活用し、わかりやすい授業に努めている。 80%以上の生徒が、授業中に自らの考えを進んで発表している。 85%以上の生徒が「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立て、集めた情報を整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 電子黒板などのICTを効果的に活用した授業を行ったと回答した教員は86%である。教科の特性上、電子黒板の使用の頻度が高い教科があることを考えれば、大半の教員が活用できている。 92%の生徒が「授業は分かりやすい」と肯定的な回答をしている。 「自分の意見や考えを伝える場面がある」と答えている生徒は98%いるが、「授業中は、自分の意見や考えを進んで発表している」と答えている生徒は66%であった。いずれの数値も前年度を上回っており、グループやペアでの学び合い学習を通して、自分の意見を積極的に発表する生徒が増えている。 3年生の全国学力学習状況調査では、90%の生徒が「総合的な学習の時間」に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると答えている。(全国58%、岡山県58%) 3年間の系統的な計画のもと、積極的に課題解決学習に取り組んでいる様子がよくわかる。また、94%の生徒が「学校行事や総合的な学習の時間に積極的に参加し、充実感を味わっている」と回答している。 	B
2	確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着と自学自習の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰りの会でドリル学習(夕学)を行うことで、基礎学力の向上を図る。 自学自習のノート作りや家庭生活プランニングを指導することで、学習習慣の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 90%以上の生徒が、丁寧に課題やドリル学習に取り組んでいる。 80%以上の生徒が、1時間以上家庭学習に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰りの会のドリル学習(夕学)では、83%の生徒が「まじめに取り組んでいる」と回答している。基礎的な知識や学力の充実が、全ての学習の基盤となるので、意欲的な学習場面となるように働きかけていく必要がある。同じような取組が継続して、マンネリ化していることが考えられるので、努力や積み重ねの意義を伝え積極的に評価することで改善していきたい。 「家庭学習に1時間以上取り組んでいる」と答えている生徒は66%いる。(3年生全国学力学習状況調査 全国68% 岡山県57%、2年生標準学力調査 全国56%、1年生岡山県学力学習状況調査 岡山県66%) 家庭学習をより充実させるために、生活ノートの改善を図り、3学期より試行する予定である。 	C
3	支え合う生徒	<ul style="list-style-type: none"> 良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学び合いを通して、共につながり居場所のある学級づくりに取り組む。 授業や学校行事を通して、考えを述べ合ったり、互いを認め合ったりする場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月のQUアンケート結果よりも学級生活に満足している生徒が増えている。 80%以上の生徒が「意見を述べる場面がある」と回答している。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月のQUアンケートの結果では学級生活に満足している生徒は、1年74%、2年75%、3年76%と全国平均の37%を大きく上回っている。また、5月に比べて7月の方が満足している生徒が増えている。 90%以上の生徒が「自分の意見を考えを伝える場面がある」と回答している。学校行事では自分たちの意見を出して取り組んだ結果、達成感を味わうことができている。その結果、グループ学習の場面などお互いに意見が言える場があると90%以上の生徒が回答している。ともに学び、意見を発表し合える環境が整ってきている。 	A
4	支え合う生徒	<ul style="list-style-type: none"> 社会的実践力が身につくようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会や専門委員会の活動と連携し、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。 生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 80%以上の生徒が、矢掛中学校三つの誇りを意識して実践しようとしている。 60%以上の生徒が地域の活動に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 「あいさつができる」96%、「時間を守る」95%、「清掃ができる」92%と基準を大きく超えている。3つの行動目標に対する生徒の高い意識が窺える。今後も、学校教育全体の中で指導していく。 夏のボランティア活動は178名の生徒が参加し、152名の生徒が公民館活動や町主催の行事に参加し、地域住民の方々と交流を図っている。このような奉仕的活動や地域との交流活動によって、感性を豊かにし、実践力を向上させることができている。 	A
5	生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> 学校に適切にない生徒への支援を充実させる。 学校生活に適切にない個別の支援を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校対策、小中連携の効果的な取組を行うとともに、スクールカウンセラーや外部機関との連携を一層密にする。 生徒指導上の課題を学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密に取りながら、落ち着いた学校づくりに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 不適応傾向のある生徒について、専門家と連携して支援方針を定め、状況に応じた他機関の援助を得ている。 生徒指導の方針を徹底し、学校アドバイザーや関係機関と連携をとり、生徒指導上の課題のある生徒に対応していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校の未然防止のために、入学する前に小学校と連携をとり、不登校傾向のある生徒に声をかけ中学校を案内し、学校の様子を知らせるなどして心的不安を緩和するようにした。また、全生徒に学期ごとの教育相談を実施し、生徒理解に努め、必要に応じてスクールカウンセラーや外部機関との連携をとっている。 スクールカウンセラーへの相談件数は78件(11月11日現在)である。そのうち不登校に関する相談は39件、友人関係で3件、心身の健康で1件、発達障害で22件、家庭環境で1件、その他が12件と生徒、保護者が抱えている問題について相談ができている。今後も連携をとり指導に生かせるようにしたい。 現在、各学年に不登校傾向のある生徒がいる。学年団を中心に対応に当たるとともに、個別の支援ノートを作り1回職員間で回覧し、情報交換する事で学校全体で支援できるようにしている。また、心の教室の支援員や、ひまわりの家、スクールカウンセラーやソーシャルワーカー、家庭環境改善サポーターと連携をし、必要に応じてケース会議を開き個別に支援する方法を協議している。スクールソーシャルパートナーの支援や学校アドバイザーの助言を生かし、落ち着いた学校づくりに取り組んでいる。 	B
6	生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援コーディネーターを中心に教職員・支援員が連携を密にし、個々の専門性を高め個別の支援を充実させる。 関係機関、専門家、保護者と連携し、個別支援を充実させる。 特別支援教育に関する校内研修を行い、専門性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別な支援を要する生徒が安心して充実した学校生活を送っている。 学校、家庭、地域で支援方針を共有し、一貫した支援を行い、関係機関と連携し、事例ごとに適切な支援方針を定め支援している。 特別支援教育に関する校内研修を研修計画の中に設定し、計画的に行っている。また、研修したことを全教員が実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学級生徒23名、通常の学級での特別支援ニーズを持つ生徒13名については、前年度から情報を収集し、個々の生徒の特性と有効な支援、良くない関わりについての表を作成し、それぞれの生徒に応じた支援ができるようになった。 保護者のアンケートでも教員の生徒への対応について肯定的な記述が多く見られ、生徒が安定した学校生活を送れている事が伺える。 各担任を中心に家庭訪問、連絡帳、電話などで家庭との連携を密に図っている。西備支援学校のコーディネーター、町の保健福祉課との情報交換や相談などを通じて関係機関とも連携を図っており、必要に応じてケース会議等を開いて支援の方向性を検討できている。 特別支援教育に関する校内研修を、研修計画の中に設定し行った。 6月には特別支援教育の視点を取り入れた個々の支援ニーズに応じた授業方法、8月には特別な支援の対象となる生徒が安心して過ごせる学級集団づくり、9月には特別支援教育の視点を取り入れた授業研究の研修を行った。 	B

分析・改善方策

電子黒板やデジタル教科書を取り入れた授業は多くの教科で行われている。今後も、新しくなったデジタル教科書をより効果的に使えるように、各教科での研修が必要である。

「学び合い学習」の成果として、ペアやグループでの活動が多くなり、表現活動の充実が図られてきた。

全国学力学習状況調査や岡山県学力学習状況調査の結果を受けて、夕学での全国学力学習状況調査の演習や発展問題を取り入れた授業展開を継続的に行う必要がある。

家庭学習の習慣づくりが大きな課題になっている。教師の側の課題としては課題の出し方や提出方法の工夫が必要である。また、家庭での生活の見直し(プランづくり)や町全体として取り組んでいる「家庭学習強化期間」にも連動して、家庭と協力して学習習慣の定着を図りたい。

定期的にQUアンケートを実施することで意識して学級での所属感や人間関係を知り、望ましい人間関係を構築できるように取り組んでいる。今後も研修を重ね、有効に活用したい。

夏のボランティア活動や地域のボランティア活動へは延べ330人の生徒が参加し、ボランティア活動が学校全体の取組となってきている。

矢掛中学校の三つの誇り「あいさつができる」「掃除ができる」「時間を守る」は生徒会が中心になって意識的に活動している。日常生活から賞賛し、指導を続けていきたい。

学校行事や日々の生活の中での達成感や自己有用感を持つことができるようにしていきたい。

中1ギャップの克服のため、年2回の中学校体験授業を行っている。また、心の教室や適応指導学級「ひまわりの家」とも連携を図り、不登校問題の改善に努めている。

特別支援学級に在籍する生徒だけでなく、通常学級に在籍している生徒の中にも支援を必要とする生徒の数も多くなってきている。そのため、特別支援教育を校内研修の大きな柱の一つとしたい。

学校関係者評価

1. 確かな学力

基礎学力に関しては、全国学力学習調査の結果だけでなく、多面的に検討していくことが重要である。定期テストその他を活用し、矢掛中学校独自の「基礎学力」把握の手法を模索すると同時に、学年によって生徒の実態も異なることから、中長期的な展望に立って課題解決を図る必要がある。

家庭学習に取り組む時間が短く、学習の積み重ねや学習習慣の確立が依然として課題となっている。生活ノートの改善等、具体的な取組は好意的に評価できる。より充実した家庭学習となるように、家庭との連携・課題提示や評価の個別対応といった視点を重視するとともに、矢掛町全体として継続的な家庭学習の指導・取組を行う必要がある。

「自分の考えを伝える場面がある」のアンケート項目に98%の回答が得られたことは、グループ学習を等取り入れた学び合いの授業形態を学校全体で推進している成果である。公の場で自らの意見を堂々と述べるができるように、表現力の更なる伸長を目指した取組を継続してほしい。

2. 支え合う生徒

生徒のボランティア・地域活動が非常に活発になされおり、良き伝統になっている。ボランティアを通して、地域の人との壁も少なくなり、「地域力」によって生徒の学習も向上している。生徒は積極的に自ら考えて動けるようになっており、生徒のプレゼン力も高まってきていることは高く評価できる。

生徒のアンケート結果によると、矢掛中学校の3つの誇り「あいさつができる・時間を守る・掃除ができる」の達成感が高い。QUテストの「学校生活の満足度」についても、全国平均の30%と比較して、矢掛中学校の生徒は70%と高い数値である。要因として、授業・特別活動・学校行事等、学校生活の様々な場面を通じて主体的に活動に参加できている生徒が多いことが考えられる。また、先にもあげたように地域ボランティアに積極的に参加し、幅広い年齢層と接することが、意欲的な生活態度の構築の大きな力となっている。そうした特色ある学校の在り方を維持発展することが重要である。

3. 生徒の支援

スクールカウンセラーによるカウンセリングが機能していることを高く評価する。また、教員がスクールカウンセラーとの対話や研修を行っていることは、今後も継続してほしい。

不登校やいじめは恒久的な課題である。粘り強く取り組むとともに、数値にとらわれることなく、取組の質の向上を図ることが重要である。

生徒の支援において、学校と家庭の連携を密にする中で、信頼関係が深まる。家庭へのサポートが、生徒の自立にも大きな力を持つという視点を重視してほしい。

「Good Behavior チケット」等の取組を通して、生徒の自己肯定感が高くなるよう促していることは積極的な生徒支援の方策として評価できる。

4. 総論(全体として)

「生徒が自分の意見を言う」「あいさつができる・時間を守る・掃除ができる」といった社会性を身につけ、地域の活動に積極的に参加するよう促している。

学校の様子を学校だより「息吹」などで保護者に伝えていることは、保護者の学校に対する信頼感につながっている。保護者メールの配信も有効に機能している。今後も継続して、適時性の高い情報発信を続けていってほしい。

素晴らしい取組を行っているので、学校(教員)は自信をもって教育活動にあたってほしい。

家庭学習においては、教員とPTAが連携して各保護者に情報発信していくことを期待する。家庭学習における課題の内容の選別、課題提出後のケア、個に応じたケアを意識的に行ってほしい。そのことが子どものやる気を喚起することや学習習慣の確立につながる。

今年度は、校長の異動、若い教員の増加と学校組織に変化があった。その中で、継続した取組ができたことや課題に正面から取り組む姿は高く評価できる。

5. 設置者等への要望

学校運営協議会からの要望書に示された内容について、人事面(特別支援教育支援員の継続配置、小中連携に係る教員の加配・不登校生徒支援に係る教員の加配、習熟度別少人数指導のための教員の配置など)及び生徒の学習・生活環境を維持・向上させる施設・設備面(水漏れ箇所・テニスコートの修繕、保護者へのメール配信システムの導入)での手厚い支援をお願いしたい。

平成28年度矢掛中学校専門評価報告書

専門評価				
評価項目	観点	学校の現状(○優れている点 △改善が望まれる点)	改善の方向性	
①. 自己評価の状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○学校経営計画書に基づいて設定された、「中期目標」、「単年度目標」及び「具体的計画」に対し、実施された教育活動が的確に記述されており、自己評価が適切に行われている。 ○過年度から同記事項が採用されている評価項目は、学校経営と自己評価の継続性が確保されており、複数年度の評価結果を分析することで、矢掛町の施策の効果を検証することができる。 ○A評価となった項目については、この領域におけるその他の課題を重点化し、必要に応じて、数値化の方法や対象を変えることで、目標や計画の達成を深化させることができる。 ○多くの項目で達成基準が数値化されており、わかりやすい指標となっている。その一方で、教職員の努力の過程がわかるように、①数値を達成するに至る指導の困難や工夫、②数値化されていない項目に関する具体的な内容、などは明記されてよい。 △特に、「確かな学力」の領域において、ICT、グループ活動、系統的な時間、ドリル学習、家庭学習は、すべて「ハード面」の記述となっている。「確かな学力」は、どのような要素から成り立ち、どのような課題に取り組むのか、指導のあり方という最も重要な「ソフト面」での取り組みが明記されていない。	概ねこれまでの学校評価の蓄積を生かした自己評価が行われている。一方、過年度の評価のあり方を検討して評価の指標や記述を改善する必要も感じられる。特に、「確かな学力」の領域では、現状の課題分析を行う必要があり、その課題を軽減する手立てが必要となる。教職員間あるいは学校運営協議会で検討してはどうだろうか。	
2. 学校の組織運営	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題			
3. 学校と保護者・地域社会等との連携協力	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題			
④. 教育課題の現状認識と改善	(1) コミュニケーション力の向上	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
	(2) 学習不振児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題		
	(3) 不登校児童生徒の解消	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○適応指導教室や「心の教室」といったシステム面でのサポートだけでなく、電話や訪問などによる家庭への連絡といった関わりの面でのサポートも、非常に丁寧に行われている様子である。 ○一時期、一部の生徒に「荒れ」が見られたものの、生徒指導の取り組みに教職員が尽力したことで、そうした「荒れ」が残ることなく、全体的に落ち着いた雰囲気を作られている。 △「こうすれば解消できる」という方法はないが、家庭への連絡だけでなく生徒との関わりを通して、生徒の興味・関心をつかみ、生徒が社会とつながるよう、継続した取組が必要である。	教職員だけでなく、支援員やサポーターの情報を集約し、不登校の「発生過程」と「継続背景」を分析したうえで、「今後の見通し」を常に描いていく、担任と管理職の強いリーダーシップ及び教職員のサポートが必要である。
	(4) 特別支援教育	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○診断や判定を受けた生徒たちが、特別支援学級という物的・人的環境の中で、落ち着いて生活できるだけでなく、それぞれのペースで学習できる授業づくりがなされている。 ○通常の学級においても、全体的に落ち着いた雰囲気の中で、オーソドックスな教科指導が行われているが、めあて、伝わる工夫、授業の見通し、といった点ではばらつきがある。 △特別支援教育が「プラスα」「甘やかし」という意見と「基本事項」「個の対応」という意見とがあるため、具体的な指導の内容や方法になると、同じ方向にならない可能性がある。	理解が教員間で異なることは当然だが、政策の課題としても、生徒の人生としても、「障害／健常とは何か？」という基本的な認識から学び、教員間で意見のすり合わせをし、具体的な接点を見つける必要がある。
⑤. 学校の総合的な状況	①取組体制 ②方法の開発・共有 ③実践・実施 ④成果と課題	○学校と保護者・地域との関係は概ね良好であると思われる。中学生の活動が町全体に与える影響は大きいことから、矢掛中学校が町のコミュニティの核となるよう、より一層の取り組みが期待される。 ○従来から矢掛中学校では国や町教委の政策に積極的に協力してきたが、総じて中学校における業務が増加傾向にあると感じる教職員も多いため、政策の実行に伴う業務負担への配慮が必要である。 △「岡山スタンダード」を活用し、「わかる」授業・「楽しい」学級づくりに注力している。しかし、授業の流れや個々の展開に着目すると、スタンダードが十分に定着していないことがわかる。 ○「good behavior」チケットの取り組みを通して、生徒の規範意識の醸成や自己肯定感の向上を図っている。いずれも生徒の内面の問題であるため、生徒自身の意味づけを大事に取り組んでほしい。	保護者や地域を巻き込んだ学校づくりが概ね進められている。ボランティア交流や学校便りなど、多様なチャネルでの情報発信は、今後も継続して頂きたい。また、「good behavior」チケットの取り組みは、保護者や地域住民とのつながりを強める可能性を秘めている。	

来年度の重点・方針

<p>1. 確かな学力を身につける。 「確かな学力を身につけること」とは、「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得、これらを活用して課題解決する思考力や判断力、表現力等の育成、そして主体的に学習に取り組む態度を育むこと」と捉える。</p> <p>①学力の向上を目指した授業改善を図る。 ・主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、授業改善に取り組む。 ・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定する。 ・基礎基本の定着を図るとともに、レベルの高い課題を協働して解決することで活用力を育む。 ・各教科の授業で、電子黒板や教材提示装置等のICT機器や指導用デジタル教科書を効果的に活用する。</p> <p>②総合的な学習の時間の取組をさらに充実したものにす。 ・1学年で地域を学ぶ、2学年で地域で学ぶ、3学年で地域・社会に貢献するという観点で取り組む。3年間の系統的な取組を通して、課題設定力や課題追求力、情報活用力、プレゼンテーション力を育む。</p> <p>③家庭学習の充実を図る。 ・帰りの会でのドリル学習(夕学)を充実する。 ・「新生活ノート(矢掛版)」を活用し、帰りの会で課題と必要時間を確認するとともに自主学習を含めた学習計画を立てることを通して、自己管理能力を育む。 ・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が関心を持ち、適切に援助できるように学校だよりや学年だよりで啓発していく。</p> <p>2. 支え合える、認め合える、繋がり合える集団づくりをする。 ①良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。 ・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。 ・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。 ・「good behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、信頼関係を構築する。 ②社会的実践力が身につくようにする。 ・生徒会や専門委員会の活動を通して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。 ・情報モラル教育を充実させ、情報端末(スマートフォンを含む)を、正しい判断力を持って使えるようにする。 ・「地域に支えられ、地域を支える学校」として、生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。</p> <p>3. 学校生活に適応できるように個別な支援を充実する。 ①学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。 ・不登校の未然防止に向けて、小・中連携の効果的な取組を行うとともに、スクールカウンセラーや外部の関係機関との連携を一層密にする。 ・生徒指導上の課題の未然防止に向けて、学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密にする。防犯教室や講演会を行い、規律のある落ち着いた学校づくりに取り組む。 ・学校生活アンケートを定期的に行ったり、生徒に関する情報の集め方を工夫したりすることで、いじめや不適応の早期発見、早期対応に努める。 ②特別支援教育の充実を図る。 ・特別支援コーディネーターを中心に教職員・支援員が密に情報交換をし、個別の支援を充実させる。 ・関係機関、専門家、保護者と連携し、個別支援を充実させる。 ・特別支援教育に関する校内研修を計画的に行う。</p> <p>4. 総論 ①生徒指導や学力向上について指導方針を明確にし、共通理解を図り、教職員が一丸になって課題に取り組む。 ②コミュニティ・スクールとして、地域とともにある学校の在り方を研究し、地域と学校をつなぐマネジメントの強化を図る。 ③心身ともに健康で、同僚性の高い教職員集団づくりを目指す。</p>
